令和５年度新収蔵美術品について

令和５年度は、美術品の購入と受贈により 15 点作品を取得しました。これらの作品は、コレクション展や、当館で開催する各種企画展で活用してまいります。

１．美術品の購入（9 点）

	作家名	生没年	作品名
1	合田（ごうだ）　佐和子（さわこ）	1940-2016	フランケンシュタイン博士のモンスター
2	〃	〃	ベロニカ・レイク
3	〃	〃	Twin
4	袴田（はかまた）　京太朗（きょうたろう）	1963-	本保裸婦像ー複製
5	吉澤（よしざわ）　美香（みか）	1959-	に―２４
6	淺井（あさい）　裕介（ゆうすけ）	1981-	土の星の人
7	〃	〃	生きている自然
8	片山（かたやま）　真理（まり）	1987-	just one of those things #002
9	林（はやし）　勇気（ゆうき）	1976-	another world -vanishing point

上記、№６～９は、富山県内在住の個人の方からのご寄附を活用し作品購入しました。寄附者のご意向を踏まえて、日本の若手・中堅作家（30 代～50 代）の作品を購入しています。

２．美術品の受贈（6 点）

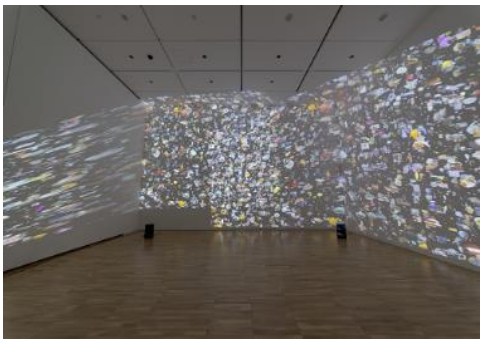
	作家名	生没年	作品名	寄附者
1	秋岡（あきおか）　美帆（みほ）	1952 - 2018	ゆれるかげー２ 1992.12.25	（非公表）
2	〃	〃	光の間　02-5-29-2	〃
3	大竹（おおたけ）　伸朗（しんろう）	1955 -	《男》のスケッチ１	大竹　伸朗氏
4	〃	〃	《男》のスケッチ２	〃
5	吉岡（よしおか）　堅二（けんじ）	1906 - 1990	巣立ち	髙野　惠子氏
6	〃	〃	烏骨鶏	〃

※各作品の詳細は、別紙のとおり

（別紙）

１．美術品の購入

1		**合田 佐和子**（1940－2016、高知県生まれ） **《フランケンシュタイン博士のモンスター》　1974(S49)年** 絵画 サイズ：H104.0×W81.0cm 材質・技法：キャンバス・油絵具 ＊収蔵作家（瀧口コレクション）
2		**合田 佐和子**（1940－2016、高知県生まれ） **《ベロニカ・レイク》　1978(S53)年** 絵画 サイズ：H117.0×W91.6cm 材質・技法：キャンバス・油絵具 ＊収蔵作家（瀧口コレクション）
3		**合田 佐和子**（1940－2016、高知県生まれ） **《Twin》　1976(S51)年** 立体 サイズ：H15.6×W22.0×D13.0cm 材質・技法：真鍮 ＊収蔵作家（瀧口コレクション）
4		**袴田 京太朗**（1963年、静岡県生まれ） **《本保裸婦像ー複製》** **2024(R6)年**（制作委託作品） 立体 サイズ：H185.0 ×W53.0×D53.0cm 材質・技法：アクリル ＊2022（R4）TADギャラリー招待作家

5		**吉澤 美香**（1959、東京都生まれ） **《にー24》　1991(H3)年** 絵画 サイズ：H201.8×W301.5 cm 材質・技法：ABS 樹脂・シルクスクリーンインク ＊1984(S59)、1988(S63)企画展招待作家
6		**淺井 裕介**（1981 年、東京都生まれ） **《土の星の人》　2016(H28)年** 絵画 サイズ：H500×W420 cm 材質・技法：帆布・土、膠、アクリルレジン、水 ＊2016（H28）招待制作、2017（H29）展示
7		**淺井 裕介**（1981 年、東京都生まれ） **《生きている自然》　2016(H28)年** 絵画 サイズ：H500×W420 cm 材質・技法：帆布・土、膠、アクリルレジン、水 ＊2016（H28）招待制作、2017（H29）展示
8		**片山 真理**（1987 年、埼玉県生まれ） **《just one of those things #002》** **2021(R3)年** 写真 サイズ：H120×W160 cm 材質・技法：Ｃプリント、オリジナルデコレーション額
9		**林　勇気**（1976 年、京都府生まれ） **《another world―vanishing point》** **2022(R4)年** 映像インスタレーション サイズ：投影サイズに合わせ変更可能 材質・技法：４Ｋビデオ 6 分 30 秒、音楽 ＊2022（R4）年企画展招待・出品作

・　合田　佐和子（ごうだ さわこ）の絵画作品の特徴の一つは、映画雑誌のグラビヤやブロマイドをモチーフとしている点である。今回購入の油彩画 2 点は、映画「フランケンシュタイン」(1931）のスチル写真に基づくものと、1942 年のアメリカ映画『拳銃貸します)』出演のベロニカ・レイクの写真が元になっているが、特徴的な色調で独特な世界観を表現している。当館ですでに収蔵している作品は「瀧口コレクション」に分類される小品のオブジェ類である。今回の油彩画は、合田佐和子の画業を紹介するのにふさわしい作品である。

　また、立体作品の《Twin》は、合田の依頼により彫刻家・三木富雄（1937-1978）が鋳造したものである。合田は、1970 年代後半から 80 年代前半にかけて、油彩画に代わる表現メディアを模索していたが、このような鋳造による作品は類例もなく珍しい。合田作品の多様性を示す作品として貴重である。

・　袴田　京太朗（はかまた　きょうたろう）は、1980 年代より、近代「彫刻」を問い直し、現代における「彫刻」の可能性を追求してきた。令和 4 年度「アーティスト@TAD」招聘作家として、当館が所蔵する本保義太郎作《裸婦像》(1896 年頃）を拡大複製する公開制作を実施した。本保は明治の初め高岡の仏師の家系に生まれ、近代「彫刻」と苦闘した最初期の日本人の一人で、渡仏しロダンに面会するも若くして客死したため残る作品は少ない。公開制作では、本保作品を３Ｄ計測し、そのデータをもとに発泡スチロールとスタイロフォーム積層により複製、像高約４ｍの作品が完成した。これを契機に、恒久的素材であり、作家の代表的手法であるアクリル板積層で作品化したものを収蔵し、本保が生きた「近代」を再考できる彫刻として収蔵し活用したい。

・　吉澤　美香（よしざわ みか）は、1980 年代初頭の日本の絵画表現で注目を集めて以降、制作・発表を継続している作家である。本作は、キャンバスではなく、空間との一体化を意識したという樹脂板にシルクスクリーン印刷用のインクで描くという、当時の吉澤の絵画表現の特性がよく現れているものである。また、吉澤の作品が注目を集め始めた 80 年代後半に近い時代の作品であり、表現としては 80 年代の絵画の一傾向としてのグラフィティ的な要素を汲みつつ、作家本人が絵画制作において目指した「描く行為そのものの身体性」がよく現れており、作家の代表作の一つである。富山県立近代美術館の 80 年代の展覧会で、当館とゆかりの深い美術評論家、東野芳明の推薦で 2 回招待出品をしている。20 世紀美術を紹介してきた当館のあゆみをたどることもできる作品である。

・　淺井裕介（あさい ゆうすけ）の 2 作品は、当館の前身の富山県立近代美術館の企画により、2 週間富山に滞在し、エントランスにて、地元のボランティアと一緒に公開制作をした作品。完成した作品は、クロージング展「MOVING!」(2016 年)、当館の開館記念展「LIFE 展」(2017 年）と、新旧ふたつの美術館で展示され、人気を博した。当館にとって、記念すべき作品である。近代美術館と富山県美術館（当時、工事中）の土、呉羽山の土、富山市内の土などの他、これまで泥絵制作を行ってきた青森、熊本、インド、テキサス州ヒューストンの土も使用されており、滞在場所の土を用い、独特の世界観で、場所にあわせた絵画表現をおこなう、淺井裕介氏の制作技法、特徴が発揮されている代表作といえる。

・　片山　真理（かたやま まり）は国内外で活躍する写真家である。本作は、フィルムプリント写真で撮影したセルフポートレイトを基盤に、手などの彼女の身体の一部や、オブジェ制作のときに利用する作家が好む布や貝殻などをパーツ化して、デジタル画面で構成したアナログとデジタルが融合した作品である。作者の姿には、ハイヒールを履いて闊歩することへの強いこだわりをもつ作家の挑戦や意思の強さがあふれている。その姿は、カッコよさなど、見る者にとってそれぞれの「ハイヒール」を想起させるものであり、作者の強い意志を共有できる作品である。

・　林　勇気（はやし ゆうき）の代表作のひとつ《another world》は、無数の切り抜かれたカラフルな画像（イメージ）が、うねるような音とともに、まるで宇宙空間のような無限の奥行の中を漂っていく。その様子は、私たちが急速に、日々膨大な画像（情報）が蓄積され、共有され、消費されていく不可視のデジタル世界、「もうひとつの世界」に取り囲まれていることをすぐれて体感的に想起させる。ときに床置きされるプロジェクターから投影される映像は、鑑賞者自体も取り込み、映像が「光（情報）にすぎない」ことも明示する。本作は、当館で 2022 年度に開催した自主企画展「デザインスコープ展」のために制作された「another world」シリーズの新作で、展示環境に合わせ柔軟に展示可能であり、さまざまな展示活用が見込める。

２．美術品の受贈

1		**秋岡 美帆**（1952-2018、兵庫県生まれ） **《ゆれるかげー２ 1992.12.25》** **1992(H4)年** 版画 材質・技法：麻紙・NECO プリント サイズ：H218.0×W275.0cm ＊日本国際美術展 富山県立近代美術館賞['84]作家 ＊2001（H13）年企画展招待、収蔵作家
2		**秋岡 美帆**（1952-2018、兵庫県生まれ） **《光の間 02-5-29-2》 2002(H14)年** 版画 材質・技法：麻紙・NECO プリント サイズ：H220.0×W276.0 cm ＊日本国際美術展 富山県立近代美術館賞['84]作家 ＊2001（H13）年企画展招待、収蔵作家
3		**大竹 伸朗**（1955-、東京都生まれ） **《《男》のスケッチ１》 1975(S50)年** 絵画 材質・技法：紙・鉛筆、インク サイズ：H35.8×W25.8cm ＊2023（R5）個展開催、収蔵作家
4		**大竹 伸朗**（1955-、東京都生まれ） **《《男》のスケッチ２》 1975(S50)年** 絵画 材質・技法：紙・鉛筆 サイズ：H25.7×W35.8 cm ＊2023（R5）年個展開催、収蔵作家

5		**吉岡　堅二**（1906-1990、東京市生まれ） **《巣立》　1949(S24)年** 絵画 サイズ：H73.3×W67.2 cm 材質・技法：和紙・岩絵具 ＊収蔵作家
6		**吉岡　堅二**（1906-1990、東京市生まれ） **《烏骨鶏》　1957(S32)年** 絵画 サイズ：H59.3×W42.7 cm 材質・技法：　和紙・岩絵具 ＊収蔵作家

・　秋岡　美帆（あきおか みほ）は、風、光、樹々が見せる一瞬の表情をカメラで捉え、それを麻紙やキャンバスにNECO（ネコ）プリント技法で拡大した大作を発表し、現代日本を代表する版画家の一人である。当館では、平成13年開催の「トライ・アート2002　ミライズム空間」展に招待し、大々的な作品展示も行ったゆかりもある。また、初期の《See(Blow the wind)》と1998年の《光の間’98-12-16》の２点を既に収蔵しているので、今回の光の流れやゆらぎをとらえた特徴的な大作２点を加えて収蔵することで、秋岡の活動を俯瞰できるようになる。

・　大竹　伸朗（おおたけ しんろう）は、絵画や版画素描や彫刻のみならず、インスタレーション、絵本、音楽、エッセイなど様々な表現方法を手掛け、1980年代以降トップランナーであり続けている。本作２点は、大竹が19歳から20歳にかけて開始した《男》（1974-75）の制作にあたり、細部の構造や形態を検討するために描いたスケッチである。2023年開催の個展にも出品された、《男》が当館に収蔵されていることもあり、作家自身により寄贈された大変貴重なものである。大竹伸朗の初期作品の調査研究に役立つとともに、作家の思考がよみとれるデッサンとして活用したい。

・　吉岡　堅二（よしおか けんじ）は富山県立近代美術館で1983年に開催の「富山を描く-100人100景」展のために、委嘱制作をした《雷鳥》を出品し、同作は当館の収蔵作品となった。令和3年度には、吉岡の代表作である第26回ヴェネチア・ビエンナーレ出品作の《水禽屏風》（1951年）と第19回新制作協会展出品作の《水鳥屏風》（1955年）の２点を収蔵した。現在、屏風２点と絵画１点の計３点が収蔵されているため、今回の《巣立ち》と《烏骨鶏》を収蔵することで、コレクションの厚みが増し、日本画の革新を追求し続けた吉岡の歩みをたどることができる。